

アジア歴史資料センターの広報活動について

森川 博文
アジア歴史資料センター

現状

アジア歴史資料センター（アジ歴）は、今年で開設9年目を迎える。これまでに、アジ歴で公開した資料画像は本年2月末で約2,000万画像という膨大な数になった。このような資料を国内外の多くの人々に利用してもらい、歴史の事実を共有してもらおうことが、我々の目的である。そのため、これまで、国内外の大学や研究会等においてアジ歴を紹介する講演会を開催したり、インターネットを利用した広報をおこなってきた結果、現在当センターホームページのトップページへのアクセス数は一日あたり、2,000件から2,500件の間で推移している。同数字は開設当初（例えば平成14年は年間97,390アクセス）に比べればかなり増加しているが（平成21年は925,242件）、ここ2、3年はあまり変化がない。おそらく大学や大学院の歴史研究者には、概ね認知され、利用されているものの、一般の人々にはまだまだ認知度が低いためであると考えられる。

昨年3月、当センターは研究者や中高生、一般人等を対象とした認知度調査を行った結果、例えば、アジ歴を全く知らない、或いは名前を聞いたことがあると回答した一般人が99%（サンプル数321）、高校教諭が91.5%（サンプル数

532）であった。

当センターはこれまでのアクセス数と上記認知度調査の結果を重視し、平成21年度は一般の人々と高校教諭を対象に広報を強化する方針を打ち出し、以下の広報活動を展開してきた。特に後半で述べる高校教諭への広報については、アジ歴資料を授業で恒常的に利用してもらおう狙いがあり、非常に重要であると考える。

1. 一般の人々を対象とした広報

1.1 インターネット広報

本件広報は、「スポンサーサイト広告」（例えば、Yahooで太平洋戦争と検索するとアジ歴広告が出てくる。通年）を平成16年7月から、「バナー広告」（読売オンライン等に動画広告を掲載。年に2回、各1週間）は平成17年3月から、タイアップ広告（All Aboutにアジ歴の資料を紹介。年に2回、各1月）を平成19年12月から実施している。かかるインターネットによる広報効果は大きく、掲載期間の毎日のアクセス数は、通常の数倍に増えるが、終わると元に戻ってしまう。これは、認知度は増加していると予想されるものの、それがかならずしも恒常的な利用増加につながっていないことがうかがわれる。

1.1.1 「紀香のアジ歴スペシャルコーナー」の作成およびポスター配布

上記の通り、アジ歴という存在は認知されて

森川 博文（もりかわ ひろふみ）

独立行政法人国立公文書館アジア歴史資料センター
資料情報専門官。

いるものの、一般の人々にあまり利用されていない背景には、歴史に興味がない、公文書はとつきにくい等の意見があるが、これらを考慮し、アジ歴にもっと親しみをもってもらい、また公文書になじんでもらって、利用してもらうとの観点から、21年度は、有名女優を起用した画期的な広報を実施した。

女優の起用については、センター内で数十名の候補を挙げ検討した結果、知名度が高く、国際的な活動も行っている藤原紀香氏に協力をお願いすることとなり、同人より、趣旨をご理解の上、ご協力して頂くこととなった。

広報の一つは、昨年7月に同人を用いたポスターを作成し、国内にあっては、全国の主な鉄道の駅、高校、大学、図書館、都道府県庁、市区町村、地方公文書館等、海外にあっては外務省や国際交流基金の協力を得て、全世界の在外公館、基金事務所、公文書館、日本研究所等に配布した。

また、アジ歴ホームページに「紀香のアジ歴スペシャルコーナー」を設け、動画を用いた6つのページと静止画のみによる20のページにおいて、紀香氏によるアジ歴資料の紹介をおこなっている。本件は一つの大きな試みであるが、今後同静止画ページは、増加させていく予定である。

1.1.2 アジ歴コンサイス

アジ歴のホームページを大いに利用してもらうためには、自分が見たい資料を容易に探し出せる検索機能を高めることが重要であるが、現時点では探し出す資料に対する知識（何年、関連人物、事件等）や、検索のコツ等を知らなければ、容易ではない。これは今後のアジ歴の課題である。ただ、初めてアジ歴を利用する人にとって、いきなり検索を行うことは難しいので、新たに今回教科書に載っているような有名な歴史的事項に関する文書等を公開資料から取り出し、気楽に見てもらおうようなコーナーを設けた。

これは、以下で記述する高校での授業等でも利用できるものと期待しており、今後トピックの数も増やしていく予定である。

1.1.3 特別展

アジ歴では、資料の検索システムの他、インターネット上で、特定のテーマについてアジ歴の資料を紹介した特別展を掲載している。これまでに「写真週報にみる昭和の世相」、「公文書に見る日米交渉」、「公文書に見る岩倉使節団」、「公文書に見る日露戦争」特別展の他、主な条約と締結時の主な事件を年表形式でとりまとめた「条約と御署名原本に見る近代日本史」を公開している。

最近では、先般NHKで放映された「坂の上の雲」というドラマの影響もあり、「公文書に見る日露戦争」特別展へのアクセスが増加しており、一般の人々の関心の高さを伺わせている。

現在当センターでは、かかる期待をも考慮し、「日露展2」（仮題）を作成中である。同特別展では、上記日露展公開以降に新たにセンターのデータベースに加わった、陸軍・海軍の内部でやり取りされた電報や戦闘記録を中心に、日露戦争の様子を伝える様々な資料を紹介する予定である。例えばその中では、日本海海戦の直前、秋山真之が作戦参謀を務めていた連合艦隊司令部が送った電報（「天気晴朗なれ共波高し」）は有名）等も多数含まれている。

2. 高校生、教諭を対象とした広報

2.1 高等学校教諭への直接的広報

上記で述べた通り、当センターは、高等学校の歴史教諭にアジ歴を知ってもらい、授業で使ってもらえれば、授業内容の深みが増し、同時に学生の興味を引き、更には学生の公文書に対する理解も深まるものとなり、ひいては当センターホームページへのアクセス数も恒常的に増加していくとの考えから、21年度は、高等学校の教諭に対する広報を強化してきた。

当初は国立の高等学校や東京、埼玉等近郊の高等学校を直接訪問して、歴史担当教諭にアジ歴を紹介していたが、この過程において、さまざまな情報を得て、現在では全国歴史教育研究協議会の各地方支部の歴史研究会を中心にアジ歴を紹介する講演会を続けている。特に2009年7月に慶応大学三田キャンパスで行われた同協議会の第50回総会では、参加者約300名の教諭（校長を含む）を対象にアジ歴の紹介を行うと同時に、参加者にアジ歴の資料を配布した。その際、岡山支部の代表者から、2010年7月に岡山で総会が行われるので、是非参加してほしいとの要請を受ける等、人間関係が広がってきている。

このように地道な活動ではあるが、今後各地方の歴史研究会でのアジ歴講演会を続けると同時に、その際、上記で述べたアジ歴コンサイス等のコーナーや以下で述べる歴史教材等を利用した授業展開の試行をお願いしていきたいと考えている。

3. 教育委員会への広報

当初、当センターは高等学校を指導する各地方の教育委員会をお願いして、アジ歴の資料を授業で使用してもらうよう指導してもらえないかとの考えから、東京、千葉、埼玉各県の教育委員会を訪問し、担当者に要望したが、なかなか難しい問題があり、容易ではなかった。そのため、上記(1)の通り、直接歴史担当の教諭をお願いする方法を実施している。

ただ、上記訪問の過程において、例えば東京都が高等学校の授業形態を大きく変える方式を実施し始めていること等がわかり、これらにアジ歴をどう結び付けていくかを現在検討しているところである。

東京都は、2009年度内に、都内の全ての都立高等学校（約250校）の全教室に電子黒板、タブレットPC、小型プロジェクター、及びカートを導入し、右による授業を展開していくよう

である。また、同時に学習コンテンツ活用システムが既に設立、稼働している由で、今後各校は同システムを利用して情報を共有したり、或いは資料を入手して授業に活用していく等の活用が行われると予想される。

ただし、かかる動きはこれまで黒板を使って授業を行ってきた先生にとっては大きな転換であり、教育委員会は、PC等の使い方等を各校の教諭に指導している由であるも、順調に利用されるまでには時間がかかるものと予想される。

学習コンテンツ活用システムについては、立ち上がったばかりであり、今後内容を充実していくものと考えられる。当センターは以前東京都教育委員会の担当者にシステム立ち上げの際には、アジ歴のバナーを貼ってもらうよう要請していたため、同システムのホームページ(<https://contents.ict.kyoiku.metro.tokyo.jp/>)を確認したところ、アジ歴バナーが貼られていた。

3.1 アジ歴資料を使った教材作成

高校の先生にアジ歴の資料を授業で利用してもらうための一つの方策として、これまで北海道札幌北高校の吉嶺茂樹教諭を中心とするグループが、当センターの資料を利用した教材を作成している。具体的には当センターの特別展「条約と御署名原本に見る近代日本史」に挙げられた資料に対し、北海道で主に利用されている中学、高校の歴史教科書（日本史、世界史）に記述、引用されているかどうか、その資料のアジ歴レファレンスコード（アジ歴資料の一件に一つの番号が付されている）、及び各資料に係するIPA（独立行政法人情報処理推進機構）の歴史記録映像を付した表を作成している。これについては、当センターも積極的に協力しており、完成後はアジ歴ホームページで公開する等して、全国の高校教諭に利用してもらうことを願っている。

3.1.1 教科書資料集等の活用

上記の通り、アジ歴のデータベースを高等学校の授業で使ってもらうために、学校訪問や歴史研究会での講演会等を通じて、広報を行ってきたが、その過程で、先生方から歴史教科書の副教材（資料集、指導書等）に掲載されている公文書（抜粋）に、アジ歴の該当資料のレファレンスコード（各資料に固有の番号が付されている）を入れてもらえれば、アジ歴のウェブサイトでその資料のオリジナル画像をみることができ、便利であるので各出版社と協力して実現してほしい旨の要望があった。

当方としては、上記要望は、現場の先生方からの貴重なアイデアであり、授業での活用につながるものと考え、早速実行に移すこととした。ただ、個別に特定の出版社に依頼するわけにはいかないため、教科書出版社とのつながりがある(社)教科書協会に依頼することとした。その結果、同協会の協力を得て、昨年12月18日、同協会の会議室で、第一回目の会合をもつことができた。歴史教科書を出版している会社は、全国で十数社あるが、この内大半の出版社（10社、14名）が、同会合に参加した。会合では、先ず当方より、アジ歴の概要、検索システム等について説明し、上記要望事項をお願いした。出席者の大半はアジ歴を知っていなかったが、大いに関心を示してもらった。これを受けて、3月3日（水）に第2回目の会合を教科書協会の会議室で開催し（7社8名が出席）、詳細な要望事項と今後の段取り等について話し合いを行ったが、一部出版社から、実施に向けての具体的な質問があった。今回の会合を踏まえ、今後は各社と直接連絡をとりながら、実施

を決定した出版社に対しては全面的に協力をを行う予定である。

終わりに

以上の通り、2009年度はアジ歴の認知度向上と利活用推進のための活動を積極的に行ってきた。その結果認知度はある程度向上したものであるが、これをアジ歴データベースの利用につなげていくためには、まだまだやるべきことがたくさんあるように思う。例えば高校での授業にアジ歴データベースを利用してもらえるようになれば、アジ歴へのアクセス数が飛躍的かつ安定的に伸びることは間違いないが、そのためには、引き続き、地道ではあるが多忙な先生方と頻繁に接触する機会を持ち、アジ歴のデータベースの活用をお願いすると同時に、先生方が使えるようなコンテンツの作成や紹介も行っていく必要があると考える。また、一般の人々にアジ歴を認知してもらい、利用してもらうためには、やはりインターネットによる広報を強化しつつ、アジ歴のホームページ自体にも一般の人が興味を引くようなコンテンツを増やしていく必要がある。

また2011年秋には、当センターの新システムが稼働する予定であり、現在それに向けての準備を進めているが、これによりシステムの利便性が向上することは確かである。

以上の通り、今後もアジ歴は引き続きデータベースの拡充と利便性の向上に向け努力していくが、国内外の多くの人々が、当センターへアクセスし、公文書の重要性を認識して、大いに利用してもらうことを深く願うものである。